

平成 21 年 6 月 1 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2006-2008

課題番号：18720145

研究課題名 (和文) 会話分析から見た英語初心者の相互行為現象

研究課題名 (英文) An Ethnomethodological Investigation into Interactional Practices among Novice Speakers of English

研究代表者 ティモシー・グリア (Timothy S. GREER)

神戸大学・国際コミュニケーションセンター・准教授

研究者番号 10320540

研究成果の概要：

本研究はミクロ社会科学の観点から初心者レベルで第2言語として英語取得者の相互行為を解明する事を目的とした。中でも「繰り返しとしての受け取り」、「スピーキングテスト中の順番取り」、「英語と日本語の切り替え」等といった会話上の運用プラクティスの実態を明らかにした。データとしては、日本人と外国人の間、教室内外に行う自然な会話を録画・録音し、会話分析の使用によって分析する。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	30,000	1,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：①英語 ②会話分析 ③相互行為 ④言語教育 ⑤語用論

1. 研究開始当初の背景

教室だけで、英語は流暢になるだろうか。教科書なしで、実際に話す事も大事では。第二言語として英語を使用する学習者の間、教室であまり見られない会話的現象 (interactional practice) はむしろ教室外の

自然な英会話で行うことが多い。本研究の出発点はこれらの現象を徹底的に観察・分析をすることであった。授業中でもその自然会話のコツを取り入れるべきだと考え、学習者同士または学習者と英語母語話者の間の会話コレクションを収集した。

2. 研究の目的

本研究は初心者レベルで第2言語として英語取得者の相互行為を解明する事を目的とした。

3. 研究の方法

研究方法としては、会話分析を取り入れた。英語圏母語話者と非英語圏母語話者の間、教室内外に行う自然な会話を録画・録音し、その会話に行う社会的現象を分類・分析する。そのため、各会話を細かく記述したトランスクリプトを教材にして、発話行動別にコレクションを制作する。具体的に以下の表1の通り、さまざまな場面からの英語初心者会話を集めた。

会話人数	タスク数 (合計時間)	タスク内容
4人	20件 (2時間)	スピーキングテスト
2人	8件 (40分)	スピーキングテスト
2人	8件 (32分)	スピーキングテスト
4人	20件 (100分)	非英語圏母語話者同士のスピーキングテスト
4人	20件 (2時間)	英語圏母語話者とのスピーキングテスト
2人以上	(5時間)	英語圏母語話者との自由会話
2人以上	(10時間)	インターナショナルスクールでの自由会話

表1 データの概要

4. 研究成果

こういった自然会話を(約21時間)ビデオ・データベースにされ、分類・分析による以下の会話上現象を分析してきた。

(1)「繰り返しとしての受け取り」
相手が言ったことの一部を繰り返すことは相手のいっていることを聴いているということを示す方法の1つである。あいての発話を繰り返すことにより聞き手は自分が相手の言うことは理解しており、それを承認している、さらに続けられたしということ刻々とフィードバックしていることになるのである。このようにして聞き手は相手の言うことを受容(recipency)することになるわけである。本研究の一部は繰り返しによる受容(receipt through repetition)の構造を明らかにする。会話での繰り返しは話し手と聞き手相互の共通理解を生み、言語学習をサポートする経過が明らかにされた。

(2)「スピーキングテスト中の順番取り」
本調査は口頭能力テスト中における英語学習者同士の順番取りに焦点を合わせる。オーラル英語テスト中の会話と自然会話の比較しながら、テスト中の英会話の制度的な面を明らかにされ、「testness」(テスト性)を指す特徴を質的に分析する。その相互作用的な行為のひとつと言えるのが次の発話をindexical 選択フレーズ「How about you?」(あなたは?)である。初心者英語学習者は会話テストの際このフレーズの使用により「順番回し」(round)または「中心人物」(pivot)という二つの順番取りに注目し、自然会話との違いを分析した。この様なテスト日常会話の実力を図ることがもともとの狙いとは言え、テストの場面事態が不自然な会話を生み出すことがあることがわかった。語学教師または語学口頭試験監督がこのことを認識すべきである。

(3)「英語と日本語の切り替え」
この部分ではテスト及び語学教室での会話練習のような社会的・制度的な制限が掛っ

てくる相互作用環境で英語初心者が自分たちの母語である日本語をどのように利用し、間主観性 (intersubjectivity) がどのように達成することに焦点を当てる。Gafaranga の "medium-repair" (手段修復) という概念を採用しながら、まず出発点として、参加者自身が全ての「L2 中の L1 使用」の例を codeswitching として扱う訳ではないことに注目した。例えば、参加者にトラブルのソースとして定位せず日本語での場所名、人名、食品名または自己宛ての発話など、よく話に挿入されている。その一方、学習者にとって様々な codeswitching のケースが "repairable" (修復必要) として扱うようであり、その証拠はほとんど聞き取れない声でいう日本語やすく英語に繰り返して直すところである。このような medium-repair はよく学習者同士で発話の意味を交渉する会話に行うので、学習を育成する可能性を持つ。通常の会話授業では日本語が禁止されることが多いが、本研究の結果、語学教師はある程度 L1 の利用を許すメリットを考慮すべきことをわかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

①Greer, T., Bussinguer, V., Butterfield, J., & Mischinger, A. (2009) Receipt through repetition. *JALT Journal* 31 (1), 5-34.

査読有

②Greer, T. (2008). "Accomplishing Difference in Bilingual Interaction: Translation as Backwards-oriented Medium-repair" *Multilingua* Vol. 27,

99-127. 査読有

③Greer, T. (2008) "I don't trust you but could you put it like this?" Accomplishing (non)nativeness in bilingual interaction. In *Journal of School of Languages and Communication, Kobe University*, Vol. 4, 17-38. 査読有

[学会発表] (計 12 件)

①Greer, T. 2008 "Discourse Analysis and Identity". Held at the Japan Association for Language Teaching International Conference, Tokyo, Japan, November 1.

②Greer, T. 2008 "Observing Talk: How to hold a CA data session" at PAC7 at JALT2008 Conference, Tokyo, Japan. November 3.

③Greer, T. 2008 "Pivots and rounds. Turn-taking practices in small-group oral proficiency tests" Presented at the Second Language Research Forum. University of Hawai'i, USA, October 18.

④Greer, T. 2008 "Testness in Talk: Turn-taking Practices among EFL Learners during Oral Proficiency Tests" Presented at the Japan Association for Language Teaching PanSIG Conference, Doshisha University, Kyoto, Japan, May 10.

⑤Greer, T. 2008 "This kid's a *haafu*: Accomplishing multiethnic identity through reported ascriptions" Presented at TUJ Applied Linguistics Colloquium,

Temple University, Tokyo, Japan, February 10.

⑥Greer, T. 2007 "Receipt Through Repetition". Presented at the Japan Association for Language Teaching International Conference, Tokyo, Japan, November 24.

⑦Greer, T. 2007 "I don't trust you but could I put it like this?: Accomplishing (non)nateniveness in bilingual interaction" at 10th International Pragmatics Conference, Göteborg, Sweden, July 10.

⑧Greer, T. 2007 "Switching Languages, Juggling Identities: A sequence of multilingual, multi-party talk" Presented at the 17th Pragmatics and Language Learning Conference, University of Hawai'i, USA, March 26.

⑨Greer, T. 2006 "Multiethnic Identity in Interaction: A CA perspective". Presented in a forum on "Research approaches to bilingual and ethnic identity" at the Japan Association for Language Teaching International Conference, Kokura, Japan, November 4.

⑩Greer, T. & Usui, Y. 2006 "Suppressing Laughter in the Display of (Dis)affiliation". Presented at the Japan Sociolinguistic Sciences, Hokkai Gakuen University, Hokkaido, Japan, August 26.

⑪Greer, T. 2006 "Accomplishing Difference in Bilingual Interaction: Translation as

backwards-oriented medium repair". Presented at the 16th Sociolinguistics Symposium, Limerick University, Ireland, July 8.

⑫Greer, T. 2006 "Post-exclusionary Translation in Bilingual Interaction". Presented at the Japan Association for Language Teaching PanSIG Conference, Shimizu, Shizuoka, Japan, May 13.

[図書] (計 2 件)

①Taniguchi, H. and Greer, T. (Forthcoming). "Testness in talk: Turn-taking practices among EFL learners during oral proficiency tests" in Gardner, R., & Greer, T. (Eds.), *Observing Talk: Conversation Analytic Studies into Second Language Interaction*

②Greer, T. (In press). "Switching Languages, Juggling Identities: A sequence of multilingual, multi-party talk" in G. Kasper et al (Eds.) *Pragmatics and Language Learning* Vol. 12 Honolulu, Hawai'i: NFLRC.

6. 研究組織

(1) 研究代表者
ティモシー・グリア (Timothy S. GREER)
神戸大学・国際コミュニケーションセンター・准教授
研究者番号: 10320540

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

○研究協力者
Rod Gardner,
Griffith University, Australia・
School of Education and Professional
Studies・准教授